

皆様こんにちは。あつという間ですね、もう6月になりました。
梅雨も真っ盛りの今日この頃、お元気でいらっしゃいますでしょうか？

前ページでも触れましたが、6月3日、午前6時39分、読売巨人軍の長嶋茂雄・終身名誉監督が肺炎のため、東京都内の病院で死去しました。89歳でした。ジャイアンツファンに、野球ファンに数々の記憶を残してくれた長嶋さん。ここではその中の、伝説の、そして激闘のあの10・8決戦を振り返ってみようと思います。

監督・長嶋茂雄さんにとって、「10・8」は最高の瞬間だった。ご自身が、1959年の天覧試合で放ったサヨナラホームランと同等に印象深い試合として、**94年10月8日**、ミスターは中日ドラゴンズとのシーズン最終戦を挙げられた。

「勝った方がリーグ優勝」異様な雰囲気

ミスターは後に語る。「いわゆる『**10・8**』は**異様な雰囲気**だったな。こちらは**命がけ**、といったような激しさがあった。」長嶋監督の言う「**激しさ**」の源泉は状況にあった。この年のペナントレース、開幕ダッシュに成功した**長嶋巨人**は前半戦を48勝30敗で**首位独走**。8月24日のヤクルト戦に快勝し、2位以下に9ゲームの大差をつけたが、翌25日から**8連敗**。この間に息を吹き返したのが**中日**だった。一時は優勝争いから脱落、中日の高木守道監督の進退問題が連日、報じられながら、チームは9月18日のヤクルト戦から**9連勝**。巨人を猛追し、129試合を終えて69勝60敗で**首位巨人に並んだ**。ここに**プロ野球史上初**となる、**同率首位チーム同士によるシーズン最終決戦**が実現した。この年、巨人は球団創設60周年で90年を最後に3シーズン、ペナントを逃していた。この期に及んでのV逸は許されなかった。ただ、**戦前の予想は中日有利**だった。勢いの差、試合は中日の本拠地ナゴヤ球場という地の利に加え、**相手の先発**はこの年その**ナゴヤ球場での巨人戦で無敗**だったエース・**今中**。登板間隔も中5日と万全だった。そんな中、長嶋が「10・8」で描いた「**勝利の方程式**」は、投手力で主導権を握ることだった。**先発3本柱**と呼ばれた**槇原寛己**、**斎藤雅樹**、**桑田真澄**の投入を決断。問題は登板間隔だった。シーズンの最終盤を一戦必勝で臨んだため、先発予定の槇原は10月6日のヤクルト戦で2/3回、11球の中1日、斎藤も同じ試合に先発し、6イニングを投げていた。前日(5日)の同戦に先発した桑田も8回100球だった。「少し前から、最終戦までもつれ込んだら、3人の起用というのは頭にあった。あのゲームで中4日とか中5日とか言うこと自体おかしい。だって普通の試合じゃないんだから」



一塁ヘッドスライディングで左肩を脱臼した立浪

異様な雰囲気の中で始まったゲームは2回、先頭の**落合博満**が今中から**先制本塁打**。しかし、先発の槇原が初回のピンチこそしのいだものの、2回も無死満塁から中村武志から同点の2点適時打を浴びた。ここで長嶋は、2日前に112球を投げていた斎藤を投入した。右足内転筋を痛めていた斎藤の早期投入を長嶋はためらわなかった。結果として、この交代が試合の行方を決めた。

斎藤が無死一、二塁のピンチを見事にしのぐと、続く3回に**落合**が再び今中から右前へ**勝ち越しタイムリー**。4回の2発で**今中**を**K O**すると、5回には**松井秀喜**が**ダメ押し弾**。最後は**桑田**が締めて、一度もリードされずに優勝を決めた。「中日だって『絶対勝つ』という気持ちで臨んでいた。試合中に**両軍ともけが**で

退場者(落合、立浪和義)も出るほど**壮絶**だった。**ただ(勝因として)一番大きいのは、槇原、斎藤、桑田の3人が投げたということ**。シーズンではないわけだから。何もかも捨てて勝つ、ということだけを考えた」

登板過多の3本柱をあえて投入したことは守りを固めるのと同時に、長嶋からチームへ発信された「**負けることは絶対に許されない**」というメッセージにもなって、**選手は実力を超える力を発揮した**。一方の中日は、先発陣の山本昌広や郭源治を登板させる場面を作れなかった。2回の継投をはじめ、**長嶋の大胆で積極的な采配が、敵に主導権を渡さず、投入の機運、士気が高まるのを封じ込めた、といえるかもしれない**。



長嶋監督は、この試合を「**国民的行事**」と表現。テレビ中継の黄金時代は過去のものになっていたが、**視聴率48.8%**は**歴代でも最高の数字**を叩き出した。それだけ国民の多くがテレビにくぎ付けとなった、まさに歴史に残る一戦であった。

私自身も、この試合を最初から最後まで観ていました。何故ならば、実は私、大の中日ファンなのです。それはもう言う通りくぎ付けでした。そして長嶋さんが言う「**異様な雰囲気**」も、まさにその通りであったし、あれだけそれまでにさんざんやられてきた中日のエース今中を打ち崩したジャイアンツは、確かにこの日、いつも以上の力を発揮していたと自分も感じていました。ただそれこそが、長嶋監督の见えない力なのでは、と感じざるを得ない一戦であったと今も思っております。

長嶋監督、今まで本当にありがとうございました。そしてお疲れ様でした。
これからも野球界を見守っていて下さいね。



3回の守備で左足内転筋を痛めた落合

今月のテーマ

I 昭和のスーパースター長嶋茂雄氏
野球人生を貫き通し
6月3日光り輝いた人生の幕を下した
～麻田秀人の部屋～
『長嶋茂雄さんを偲ぶ／
激闘の10・8決戦』

想いをのせて **感謝** ありがとう

日本の鉄鋼業界の現状は深刻な状況が続いていた。しかし、今回のUSスチール買収劇で一歩前進した。

2025年6月15日**日本製鉄による米鉄鋼大手USスチールの買収**は、1年半にわたり求め続けた完全子会社のスキームで決着し、**6月18日に買収完了**となり、交渉劇に終止符を打つ。

USスチール買収を巡る主な動き ※いずれも現地時間	2023年 日本製鉄がUSスチールを141億ドルで買収すると発表
	24年 米大統領選を前にバイデン氏とトランプ氏が買収への反対を表明
	25年1月 バイデン氏が買収禁止を命令。日鉄がバイデン氏と米政府を提訴
	2月 日米首脳会談で「買収ではなく投資」で合意
	4月 トランプ氏が買収計画の再審査をCFIUSに指示
	5月21日 CFIUSによる審査終了
	23日 トランプ氏がSNSに日鉄とUSスチールの「提携」を承認すると投稿
	25日 トランプ氏「これは投資であり、(日鉄は)部分的な所有となり、米国が支配することになる」と発言
	30日 トランプ氏が演説で日鉄の巨額の投資を歓迎
	6月13日 米政府が日鉄・USスチールと国家安全保障協定を締結し、買収成立へ

日本の鉄鋼業界は、中国発の市況悪化や国内需要の減少から海外の他に成長の余地は乏しい状態となっていた。

新興のインド市場に加え、有望な米国市場で名門企業を傘下に収めることにより日鉄の世界展開に向けた最後のピースが埋まった。

「新たな時代のグローバルネットワークを完成させ日本の成長力も取り戻す」2023年当時、社長としてUSスチール買収計画を発表した日鉄の橋本英二会長兼最高経営責任者(CEO)は、買収で目指す先についてこう強調していた。

その後は、米政府との交渉で苦難の連続だったが、日鉄は執念を見せ、完全子会社化で米政府の承認を取り付けた。背景には、米国内の市場低迷への危機感があつた。

トランプ大統領が13日、**日本製鉄によるUSスチール買収計画の中止命令を事実上撤回する大統領令に署名した**。



何故一転したのか。承認した方が政権の利益になると判断したためだ。取引の内容次第で態度を変える政治スタイルは予測不能かつ柔軟でもある。

日鉄にとっても関税は追い風だ。日本からの輸出に頼らず需要地に生産拠点を構築することで関税などの影響を受けず、価格面でも優位に立ち、現地でのシェアを拡大する戦略だ。

日鉄には吉と出たトランプ氏の柔軟さだが、結局は取引(ディール)の中身次第だ。まだ予断は許されない。また、100年以上の歴史を持つ名門企業を買収したことへの米国民の反感も根強い。米国内の世論に配慮する難いかじ取りが今後の日鉄には求められる。

投手：大谷翔平の復帰が電撃決定！

ロバーツ監督が6月16日**パドレス戦での先発登板**を明言。**突然の発表に米国民は騒然『野球の神が帰ってくる』**復帰登板が実現すれば2023年8月23日のレッズ戦以来663日ぶりのマウンドとなる。右肘靱帯損傷で、23年9月に右肘手術を執行し淡々とリハビリを重ねてきた。まさにエポックメイキングな復帰だ。オープナーとして実践復帰を果たす大谷。いかなる結果を残すかに世界中の熱い視線が注がれそうだ。

サラリーマン
川柳

酒じゃなく **病院内を** はしごする

信頼と実績で皆様に愛されて38年！
生命保険・不動産の売却・買い取り すべてお任せください！



株式会社 **ASA DA**
オフィス

代表取締役 **麻田 春江**

住所：〒302-0015 茨城県取手市井野台1-7-28 E-mail: officeasada220@gmail.com
TEL: 0297-72-2401 FAX: 0297-72-6217 URL: https://officeasada.com



I 昭和のスーパースター長嶋茂雄氏 野球人生を貫き通し 6月3日光り輝いた人生の幕を下した

「ミスタープロ野球」「燃える男」と呼ばれた国民的ヒーロー
長嶋茂雄さんが6月3日 現役時代の背番号と同じ日に旅立った



長嶋茂雄さんの訃報を伝える号外
6月3日午前 東京都千代田区

長嶋茂雄さん死去、海外通信社も報道 人柄紹介

発表と共に号外が出た。

昭和の高度成長期、「4番、サード、長嶋、背番号3」の響きが日本に活気をもたらした。平成の時代も「巨人軍」の監督として数々の話題を提供し、明るさと情熱で人々の心を照らし続けた。元号が令和に変わり、89歳で死去。日本列島にとって悲しみの日になった。

愛された天上の星

非凡なプロ意識・ファンを魅了し続けた選手・監督で時代の主役・長嶋茂雄さん

プロよりも人気のあった東京六大学のスターとして鳴らした。巨人でのデビュー戦は当時、球界のエースだった国鉄(現ヤクルト)の金田正一に4打席4三振。この強烈なプロの洗礼を糧に、常勝チームの中心打者に成長していった。「ここぞ」という場面で闘志をむき出しにして、必ず期待に応えてくれた。「記憶に残る選手」と称された背番号3は、国民にエネルギーと勇気を与えてくれる頼もしいヒーローだった。

昭和天皇と天覧試合

昭和天皇が観戦されたプロ野球は、1959年6月25日に後楽園球場で行われた巨人対阪神戦で、プロ野球史上初の天覧試合として知られている。

この試合は、長嶋茂雄の劇的なサヨナラホームランで幕を閉じ、歴史的な名勝負として語り継がれている。昭和天皇が天覧試合としてプロ野球を観戦したのは、この試合が最初で最後だった。この試合は、当時「興行野球」と見なされていた。プロ野球が、国民的スポーツとして認知される転換点になったとも言われる。



セ・リーグ最終戦で中日に勝利して優勝が決まり、胸上げられる巨人の長嶋茂雄監督(肩書は当時)
1994年10月 愛知・ナゴヤ球場

指揮官としては、同率で並んだ中日と優勝を懸けて臨んだ1994年10月8日のシーズン最終戦が語り草。

先発三本柱の槇原寛己、斎藤雅樹、桑田真澄の継投で快勝した。選手として、監督として、感動の舞台を演出し続けた。この時のテレビの視聴率はなんと48.8%だった。「ON」の両輪で球界を引っ張り、打撃のタイトルでは好敵手としてしのぎを削った

王貞治さん(ソフトバンク球団会長)は、「長嶋さんがいたからこそ自分がある」と語る。洗練された高度な技術で本塁打記録を積み上げたOが「静」なら、攻撃的でファンの情緒に訴えかけるプレーで魅了したNは「動」。タイプは違うが、敬意を抱き合い、互いを追い続けて自らを高めた。それがプロ野球全体を盛り上げ、国民的スポーツとして、人気を不動のものにした。

長嶋さんこそ「永久に不滅」 全てがスーパースター

2004年3月に脳梗塞で倒れるまで、長嶋茂雄さんはキャンプ地を走り回っていた。同年8月に控えたアテネ五輪監督として、代表候補選手を激励していた。

昭和30年代から高まったプロ野球人気は、この人に支えられてきた。1958年、8本塁打の東京六大学新記録(当時)を引っ提げて巨人に入団。デビュー戦ではのちに400勝投手となった国鉄のエース、金田正一に4連続三振を喫したが、萎縮せずにバットを振る姿勢が、自らをスーパースターの座に押し上げていった。

「記録より記憶に残る選手」とは、長嶋さんのためにある言葉だ。王を超える選手はもしかすると出るかもしれないが長嶋を超える選手は出ない、と言われるほど圧倒的なオーラを発散した。

1974年10月14日、引退セレモニーで長嶋さんが発した「わが巨人軍は永久に不滅です」の名フレーズに、多くの人が涙した。

ユニホームを脱いでも、病魔と闘いながら野球を愛し、何よりも周りの人を大切にしたい一生。究極まで集中し、期待に応えようとすればするほど、信じられない結果を出す「スーパースター」。選手として、監督として、文化人として、日本でこの言葉が最も似合う人だった。ミスターの一時代は終わりを告げたが、長嶋茂雄という不世出のスターは人々の心の中で輝き続ける。

1974年10月、東京・後楽園球場
現役引退セレモニーでファンにあいさつする巨人の長嶋茂雄選手



栗山英樹・日本ハムチーフ・ベースボール・オフィサー(CBO)

「(2023年の)WBCの時に授かったメッセージは、強く記憶に残っています。『野球というスポーツがこれから先も長く続くように、一生懸命やってください』と託されました。続けて『高校野球をとにかく守りなさい』とおっしゃっていました。その時に野球界のことをすごく心配されている、という長嶋さんの思いを知ることができました。我々、野球人がこれから一番大切にしないといけない野球の原点が高校野球であることを、再認識できました。長嶋さんのその思いのお陰でWBCも優勝できたと思っています。本当に残念で悔しいですが、長嶋さんの思いを少しでも体現できるように我々はこれからも全力を尽くしていきます。長嶋さんへの感謝は一生忘れません。野球人は皆、その思いです」

日本中が目頭を熱くした 2020年(2021)東京オリンピック聖火リレーと金メダル



国立競技場で聖火を運ぶ
王貞治氏(左)
長嶋茂雄氏(中央)
松井秀喜氏(右)

その登場に目を見張った。2021年7月23日、東京オリンピック開会式。読売巨人軍終身名誉監督の長嶋茂雄さんが「ON砲」の盟友、王貞治さん、愛弟子の大リーグ元ニューヨーク・ヤンキースの松井秀喜さんとともに聖火リレー走者として国立競技場の舞台に立った。柔道の野村忠宏さん、レスリングの吉田沙保里さん、オリンピック3連覇を果たした2人の手で国立競技場の聖火リレーがスタート。球界のヒーローたちはオリンピック・レジェンドから聖火を引き継いだ。

トーチキス役を務めたのは長嶋さん。トーチに聖火を移すと王さんにそれを委ね、松井さんに体を支えながら“走り”始めた。ゆっくりとした歩みに、「何らかの形で関わる事ができたら」と話していたオリンピックへの感慨を思った。

17年前、長嶋さんは2004年アテネ大会の野球日本代表監督としてオリンピックの舞台に立つはずだった。しかし開幕まで5カ月を切った3月4日、脳梗塞に倒れ、思いを残したまま闘病生活に入らなければならなかった。

東京オリンピックで長嶋さんが聖火リレーの走者になる事は早くから関係者が口にしていた。しかし2019年に体調を崩して以降、あまり表に出なくなり、巨人軍の練習や試合などに姿をみせても車いすだった。ひそかに日本オリンピック委員会(JOC)は車いすを用意していた。ところが本番になると、長嶋さんは松井さんに体を支えられてはいたが、自分の足で国立競技場を“走り”次の走者である医療従事者に聖火を繋いだ。前年秋から自宅地下室の歩行練習のためのマシンを使い、食事にも気を配って、この日に備えていたと聞く。その姿に多くの人たちが目頭を熱くした。

選手長嶋がプレーでこの国を元気づけてきた事を知る日本人にとって、長嶋さんは特別な存在なのである。

2021年8月7日 東京オリンピック 金メダル 悲願達成

米国との決勝戦は2021年8月7日。

日本が3回、村上の本塁打で先制した。先発の森下暢仁(広島)は緩急をつけた投球がさえ、5回を無失点に抑えた。6回からは小刻みな継投となり、米国の反撃をかわしていく。そして8回、相手の守りの乱れと山田の好走塁で貴重な追加点をあげ、最終回を栗林が締めて2-0、完封で初の頂点に輝いた。「楽な試合はひとつもなかったが、金メダルを獲りたいという思いが結束していい試合ができた」ー稲葉監督の言葉は実感だったろう。

長嶋さんは巨人を通じて祝福のコメントを送った。そこには「日の丸を背負って戦うことは思う以上に責任を感じるものです。そのプレッシャーをはねのけ、チーム一丸となって勝利をつかんだ侍ジャパン。見ていた私も感動しました」とあった。

その日から88日後、長嶋さんは天皇陛下から文化勲章を授与された。金メダルに続くご褒美は球界から初めて、スポーツ界でも水泳の古橋廣之進さんに次いで2人目である。同じ年の聖火走者も野球の金メダルも、そして文化勲章も。新型コロナウイルス禍が残した偶然という遺産だが、長嶋茂雄という人の奇跡であったかもしれない。